

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

日系国際児の文化間移動と言語・文化・文化的アイデンティティ

著者	鈴木 一代
雑誌名	埼玉学園大学紀要. 人間学部篇
巻	11
ページ	75-88
発行年	2011-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00000503/



日系国際児の文化間移動と言語・文化・文化的アイデンティティ

Moving to a New Culture at Adolescence: Language, Culture and Cultural Identity of Japanese-Indonesian Children

鈴木 一代

SUZUKI, Kazuyo

The purpose of this study is to examine how moving to a new culture during adolescence influenced Japanese-Indonesian children by using the case study method. In particular we looked at how their language and culture changed and how their cultural identity was formed. The participants were an adolescent siblings (a brother and sister) who have a Japanese mother and an Indonesian father and were born and raised in Japan. They later moved to Indonesia during their adolescence. Semi-constructed interviews were conducted 2-3 times a year. In addition, participant observations were carried out at their school. The analysis was mainly qualitative in nature. The results suggest that domicile changes by moving to a new culture or age at the time of the move play important roles for their language, culture and cultural identity.

鈴木 (2004、2008) は、複数の文化が混在する環境で育つ日系国際児 (両親の一方が日本人、他方が外国人の子ども) の (文化的) アイデンティティ形成に影響を及ぼす主要因として、「居住地 (国)」「両親の国 (文化) の組み合わせ」、「日本人の親の性別 (母親と父親のどちらが日本人か)」、「国際児の外見的特徴 (体つき、顔つき、皮膚や髪の色など)」、「家庭環境」、「学校環境の選択」をあげている。「居住地 (国)」は、自然環境や経済・社会システム等を包括しており、国際児のあらゆる側面に大きな影響を与え、個人を作っていく土台 (基礎) である (鈴木・藤原、1994；鈴木、1997)。また、「両親の国 (文化)

の組み合わせ」は、他者から見られる国際児のイメージ、あるいは、社会のなかでの国際児の位置付けと関係するので、同じ国に居住する国際児であっても、両親の国 (文化) の組み合わせによって経験が異なってくる。「日本人の親の性別」は日系国際児の国籍等の法律にも関係し、「外見的特徴」については、居住地の人々と近似してる場合には、国際児として目立たないことになる。「家庭環境」には、親自身の属性 (教育水準、性格、言語能力、職業、宗教、両文化への理解度など)、夫婦関係、きょうだいの有無、言語使用、経済状態、将来設計などが含まれ、「学校環境の選択」とは、学校教育 (高等教育を含む)

キーワード：文化間移動、日系インドネシア人青年、言語・文化、文化的アイデンティティ事例研究

Key words : moving to a new culture, Japanese-indonesian adolescents, language and culture, cultural identity, case study method

の選択である。これらの要因が、子どもの発達過程のなかで、さまざまに絡み合い、国際児のアイデンティティ形成に関与していく。さらに、国際児の「出生地」「年齢」「性別」なども、(文化的)アイデンティティ形成に影響を及ぼす要因である(鈴木、2005、2008)。

国際児(国籍と民族が異なる男女の間に生まれた子ども)は、成長する過程で、親の意欲や仕事の都合によって、文化間移動を経験する場合が少なくない(鈴木、2004)。たとえば、両親のどちらかの国で生まれても、他方の親の国に移動したり、その後、また出生国に戻る場合がある。また、他方の親の出身国への短期の文化間移動(一時帰国)は、一般的に多くの国際児が経験している。このような二文化間(主に親の出身文化間)における頻繁な移動は、国際児の成育過程における特徴であり、国際児は、文化間移動のたびごとに、自分自身にとっての両文化の意味を吟味する機会をもち、長期・短期の文化間移動を繰り返しながら、文化的アイデンティティを形成していく。特に、長期の文化間移動の場合には、居住地を基盤に、さまざまな側面に変化が生じ、その中で、国際児は文化的アイデンティティを構築/再構築していくことになる(鈴木、2004)。

Schrader, et al. (1979)や箕浦(1984、1990)は、異文化に移行した年齢によって、文化的アイデンティティ形成が影響されることに言及している。Schrader, et al. は、外国人労働者の子どもがドイツに入学した年齢を、0-1歳(入学後の出生を含む乳児期)、1-5歳(学齢期以前)、6-14歳(学齢期)の3つに分けた上で、学齢期の子どもは、自文化を習得してから異文化に移行するので、ドイツでは大きな適応困難を体験し、ドイツ語を習得して

も、自文化に同一視し、外国人としてのアイデンティティにとどまることを指摘している。また、文化的アイデンティティ形成を、文化特有の対人関係行動の意味空間(文化文法)の体得によってとらえようとした箕浦も、米国に文化間移動をした日本人の子どもが米国入学時の年齢や滞在期間と文化的アイデンティティの関係を明らかにしている。すなわち、「14~15歳以降に異文化圏に入った場合には、それまで暮らした母文化の影響を濃厚に受けており、異文化圏に移行しても、その文化文法にすぐ染まることはない。しかし、必要にせまられて、新しい文化環境にみあうように、外見上は、行動形態が変わってくる。行動面ではいわゆるバイカルチュラルな人間になっていく。」(1984, p.253-254)。さらに、対人領域の意味空間が体得される最も重要な時期は、9歳から15歳までの6年間であると推定しており、その期間を米国で過ごした子どもは、日本に戻ってきても日本人としてのアイデンティティに違和感を感じるとしている。これらの研究は、移民の子どもや海外勤務者の子どもを対象としており、国際児の文化間移動と言語・文化や文化的アイデンティティに焦点を当てた研究はほとんどみあたらない。

ところで、国際児は多様であることが指摘されている(鈴木、2004)。その多様性を生み出す条件について、鈴木(2004、2008)は、「生まれながらに規定される条件」(国際児が生まれたときからすでに決まっており、自分自身では、選択できない事柄)、「生後規定される条件」(生後、成長とともに変化する事柄、すなわち、一定の年齢に到達するまでは、他者(多くの場合は、親)によって決定されるが、その後は、国際児自身による選択が可能

なもの、そして、「一般的な条件」（それ以外の一般的な条件）に整理している。「生まれながらに規定される条件」には、①「親の国籍の組み合わせ」、②「日本人の親が父親か母親か」、③「国際児の外見」、④「国際児の出生地」が含まれる。特に、①と②は、両親とも日本人の子どもの場合には問題にならない、国際児特有のものである。「生後規定される条件」には、⑤「国際児の居住地」、⑥「家庭環境」（特に、経済状態）、⑦「学校環境」（学校選択）がある。また、「一般的な条件」とは、年齢、性別、学年、きょうだいの有無、出生順位、など、研究の際に一般的に考慮すべき事柄である。実際には、これらの条件が複雑に組み合わせられ、さまざまな国際児が存在する。また、これらの事柄の多くは、すでに言及した（文化的）アイデンティティ形成に影響を及ぼす要因と重なるので、国際児の文化的アイデンティティ形成も多様になる。そこに、「文化間移動」という条件が加わることにより、国際児の文化的アイデンティティの様相はさらに複雑になる。

本稿では、国際児の多様性を生み出す条件の多くが同一、あるいは類似する、日本で誕生・育成し、思春期以降に他方の親の国に移動した日系国際児きょうだいをとりあげ、文化間移動が国際児青年にどのような影響をおよぼすか、特に居住地および移動年齢との関係でどのような言語・文化を習得し、どのような文化的アイデンティティを形成していくかについて、事例研究によって検討する。

なお、本稿における、文化は、「発達過程のなかで、環境との相互作用によって形成されていく、ある特定集団のメンバーに共有される反応の型」（鈴木、2006、p.41）、また、（文化的）アイデンティティは、「自分がある

特定集団のメンバーとある文化を共有しているという感覚・意識」（鈴木、2011）とする。

<方法>

1) 調査参加者

調査参加者は、日本生まれで、日本で成長し、青年期にインドネシアに移動した、日本人の母親とインドネシア人の父親をもつ国際児きょうだい（MとE）である。面接時、Mは19歳、Eは17～18歳で、両者とも、現地校（K校）に在籍していた。

2) 調査日時

調査期間は、200X年から約1年間である。Mの場合は、合計3回、1回目（約30分）、2回目（約1時間半）、3回目（約3時間）、Eの場合は、合計2回、1回目は約30分、2回目は約1時間半である。また、K校における参与観察をおこなった（4回、各3時間から4時間）。

3) 調査場所

インドネシア共和国S市に位置するK校のクラスや食堂、レストラン、および面接者の滞在施設である。

4) 調査方法と調査手続き

・主な調査方法は、現地におけるフィールドワーク、半構造化面接、および参与観察である。調査者は2000年からK校（中学および高校）で、日本ーインドネシア国際児を対象とした面接や日系国際児が在籍するクラス等における参与観察を継続している（約半年ごと、各回2～3日）。面接の際には、事前に、調査の趣旨や内容、守秘義務等について説明し了解を得た。半構造化面接の主な内容は、成育歴、二文化（国）の共通点と相違点、二文化（国）に対する気持ち、二言語・二文化習得の程度、（文化的）アイデンティティ、現

在の満足度等である¹⁾。面接調査の内容については、筆記するとともに、承諾を得られた場合には、ICレコーダで録音した。使用言語は日本語である。

5) 整理・分析

ICレコーダに録音した面接内容を起こし作成したスクリプトおよび筆記した面接内容に基づき、整理・分析をおこなった。具体的には、時系列で、「日本での生活」「文化間移動にかかわる事柄（文化間移動前後の気持ち）」「現在の生活と気持ち」「国際児であること」「将来」について、特に、面接のなかで、繰り返し言及される事柄に着目しながら整理し、分析の際には、二言語・二文化についての国際児青年の気持ちに焦点を合わせた。

<結果>

まず、両事例の背景、すなわち、両事例に共通する成育歴や家庭環境等を概略し、次に、各事例について、「日本での生活」「文化間移動前後の気持ち」「現在の生活と気持ち」「言語」「将来」「その他」に分類して提示する。事例の「 」の部分は語り、それ以外は語りを筆者がまとめたものである。その際、個人を特定されないように本質に影響を及ぼさない範囲で修正を加えている。また、下線、および（ ）内は筆者による加筆である。

1 事例の背景 一周間の環境と学校について（概略）

S市およびその周辺は、最も都市化した地域である。商店、アパート、ホテル、ロスメン（民宿）、レストラン、ブティックなどが立ち並び、交通量も多い。また、デパート、大型ショッピング・モール、スーパー・マーケット、24時間営業のコンビニエンス・スト

アなどもある。雇用が多いため、インドネシア各地（州）から人が集まっており、外国人や異文化間結婚（国際結婚）の家族も多く居住している。宗教的にも文化的にも多様なものが混在している地域である。一般的に、日本人や日系人は非常に好意的に受け入れられている。

S市およびその周辺には、インドネシアの公立（国立）・私立校のほか、多くの国際学校やバイリンガル校が存在する。K校は、幼稚園から高校までを有し、英語に重点を置く有名私立校である。中等教育からは、インドネシアの教育システムによるコースと英国の教育システムによるコースに分かれる。前者は、インドネシア語が主で、インドネシア式の教育、後者は、主に英語でイギリス式の教育をおこなう（中等教育認定コースの「Oレベル」、およびそれに続く大学進学コースの「Aレベル」）。後者の場合、教員のほとんどは外国人で、高学年になるほど生徒数が少なくなる。7年生から10年生までは、2～3クラス、11～12年生（Aレベル）では、各学年1クラスである。コースにかかわらず、公立校に比べ、比較的裕福なインドネシア人家庭（中国系が多い）の子ども、外国人、および国際児が多く在籍している。1年は7月から翌年の6月までで、2学期制（7月～12月、1月から6月）である。授業は、月曜日から金曜日までの朝8時から午後2時5分（中学・高校）、1時間は35分だがほとんどの授業は2時間単位でおこなわれる。制服はあるが、全体的に自由な雰囲気がある。

2 きょうだいの事例 一事例Mと事例E

2.1 成育歴および生育環境の概略

きょうだいは、日本人の母親とインドネシ

ア人の父親をもち、日本（関西）で生まれ、インドネシアに移行するまでは、日本で成長する。幼稚園から、一貫して、日本の公立学校に在籍する（Mは高校1年まで、Eは中学2年生まで）。4人家族で、家庭では、日本語のみで成長した（両親間、母子間、父子間、きょうだい間もすべて日本語）。小さいころから、時々、父親の出身地に家族で一時帰国している。約3年前、家庭の事情で、一家でインドネシアに移動した。移動後も、家族だけで生活しているが、近隣には親戚縁者がたくさん居住している。父親は日本語（会話）が堪能で日本的、母親もインドネシア語会話は可能である。家族の中心言語は日本語で、家庭内では食事も生活様式も日本式である。父親の希望（選択）で、K校（英国式教育コース）に通学している。宗教行事等には父親以外は必要などきのみ参加している。きょうだいの日本語は同年齢の日本人と同等であり、きょうだい間の会話も日本語である。

国際児の多様性を生み出す条件（鈴木、2004）に基づき、両事例を比較してみると表1のようになる。

2.2 事例M

事例M（19歳）は、高校1年の2学期（16歳）に移動、K校編入。日本の大学進学準備のため一度日本に一時帰国している。

1) 日本での生活

・生まれてから高校1年まで日本語で育ったので、インドネシア語はしゃべれなかった。周囲からは日本人と思われてきた。

・小学校高学年から、部活（スポーツ）をし、中学時代も部活と塾におわれる毎日を通り、ごく普通の中学生だったが、どちらかという目立つ存在で、役員などをしてきた。部活を通して、年齢の上下関係がみついた。希望の公立高校（自由な校風）に入学した。

・小学校中学年までは、1～2年に1回（各3週間ぐらい）、インドネシアに来ていたが、その後は、中学校1年の時に来ただけだった。

・父親がインドネシア人という以外は普通の日本の家庭だった。

2) 文化間移動前後の気持ち

・「“帰る”って感覚でしたね。実家は、地元はインドネシアっていう。（略）そう思われていた。私は思いたくなくなったけれどパパがそういうから、そうするしかなかった。

表1：事例Mと事例Eの比較

事例	M	E
①組み合わせ	日本-インドネシア	
②日本人の親	母	
③外見	日本人	日本人
④出生地（国籍）	日本（二重国籍）	日本（二重国籍）
⑤居住地	日本（～高1-16歳） →インドネシア	日本（～中2-14歳） →インドネシア
⑥家庭	4人家族*（第1子）	4人家族*（第2子）
⑦学校	日本の幼稚園→日本の小・中・高→インドネシアの現地高	日本の幼稚園→日本の小・中→インドネシアの現地中・高
⑧年齢	19歳**	17-18歳**
⑨性別	女	男

* 小さい頃は祖父母と同居 ** インタビュー時点

（略）いつかは帰らなくてはいけない場所がインドネシア。でも私は帰る必要がないと思っていた。日本で育ったし、日本で大学出て、日本で暮らせばいいっていう感覚でずっといたんです。

・楽しい時だったので移動したくなかった（高1）。K校への編入時、英語がしゃべれないことや、入学時期等の関係で学年を下げたため、ほかの生徒との年齢差（2歳程度）があった。英語は学びたかった。

・移動により、環境がまったく変わってしまった。「別の場所ですよ。」「感覚の違いとか。やっぱり育ってきた環境が違うといろいろな面で感覚が違うじゃないですか。ささいなことなんですけど、大きいんですよ。」「日本語で、日本人として…（略）便利さのなかで育ってきたので、ここの不便さはいらします。」

3) 現在の生活と気持ち

・16年間日本に住んでいたので、日本人の感覚なので現地の感覚にはなじめない（例：時間を守らない、規律のなさ、いい加減なところ、夢ばかり見て現実的でない）。「小さいころから、日本にいてそのままきたら、感覚はそう（日本）です。」ここにも慣れてきたが（金銭感覚等）、ベースは日本。「こっちに来てても日本人。」「まったくの日本人。」日本人と意識している（インドネシア人とは思えない）。「故郷は日本（前居住地）、インドネシア（現在の居住地）は父親の実家というだけ。インドネシア人に見られたくないし、インドネシアは嫌い。」

・日本には周囲に親戚やいとこがいなかったが、ここにはたくさんの親戚がいて、どう接したらいいかわからない（「感覚がわからない」「いっしょにいるのが疲れちゃう」）。

・K校ではみんなとうまくやっているが本当の友達、親友はいない。日本にはたくさんの友達がいて、EメールやSkypeで話しているし、親友もいる。「ここでは心を許して話せる友達はいない。学年が違うからじゃないですね。（略）感覚がここで、薄っぺらくて、信頼できる友達ができない。作り方も知らない。」

・K校は現地の公立校に比べれば環境がいいが勉強しか教えない。クラブ活動も盛んではない、協調性がないので、みんなが丸くなって何かをやろう、頑張ろうというのがない。「別の場所で育って、教育を受けてきたので、いろいろな感覚が違うんですよ。（略）K校はちょっと合わない。」

・「郷に入れば郷にしたがえて文句は言えない。入ってきた者が従う。」

・ここに住んで良い点は、英語とインドネシア語ができるようになること。

・「ここはつまらない、刺激のない場所で、ここに住んでいる限り、観光とは無縁、日本に住む日本人が夢見る場所ではないけれど、住まないと得られないものもある、わからないこともあるので、来て住んでみてよかった。」

4) 言語

・言葉は、日本語、英語、インドネシア語（あまりよくできない）の順でできる。日本語は普通の日本人と同じ。インドネシア語は2（会話2、読む1、書く0）、インドネシア語には興味がないし、あまり使わない。地域語は0.5ぐらいしかわからない。英語は7（会話8、読む、書く7）で友達とは英語を使う。（数値は、10点満点における評価）

5) 国際児であること

・「幼稚園のときから、お父さんが違うと思っ

ていた。ハーフだと思っていた。年中さんのころから。4歳、5歳ぐらい。インドネシアに行ったりする環境があったからではないですか。」「自分はちょっとみんなと違うぐらいで、ちょっと特別みたいな感じで、みんなに言っていたと思います。たぶんパパも“お前はハーフなんだよ”って言っていたんだと思います。」自分が意識したのではなく、まわりに気づかされた感じがなんとなくある。あまりにも言われるので、ハーフなんだとまわりに言うようになった。

・小学校3年生ぐらいまでは、ハーフでみんなと違うという意識（誇り）が強くあり、それでいじめられた。それをきっかけに人を傷つけることを言うてはいけないということを学んだ。それ以後は、ハーフということ言わなくなり、いじめられることもなかった。特に、中学からは、ミドルネームを使わなかったのので、ハーフだと知らない子が多く、日本人と思われていた。しかし、物事の中心となり、目立つタイプだった。日本で生まれ、日本で育ち、学校に行ったので、完全に日本人。

・ハーフということをいやではない。考えようによってはよかった。しかし、特に考えたことはない。「欧米人とのハーフだったら、もっと感覚が違ったと思うんです。あこがれがあるんです、みんな。日本とアジア人とのハーフの間で。(略) 欧米人との間に生まれたかったよねって。単なるあこがれですよ。ああいう顔をもちたかった。スタイルになりたかった。けっこう、みんな。カッコいいじゃないですか。それだけのこと。おとうさんどこの人って言って、たとえば、イギリスとか。じゃあ、英語しゃべれるみたいな。見た目とかもそうですけど、そういうことを

言っただけで食いつきが違うじゃないですか。(略) インドネシアっていうと、どこ?とか。」「インドネシア人の血が流れていることについては、「別に、たいした感じはないです、今は。(略) インドネシアの血というより、こういう考えってきつとパパなんだろうなとかいうのはあります。この性格はパパなんだろうなとか(例：目立つとか真ん中でいようと思う)とか。(略) 好きになるものが、似てるとか。(略) ママからの方が影響はもっと受けている、性格とか。たぶん女の子だからだと思うんですけど。母親という方が長い。」

6) 将来

・「ここは通過地点。早くここからでたい。」12年生を卒業したら日本の大学に入学する。モラルのない発展途上国じゃなくて、先進国に行きたい。ここにいとこのなかでしか生きられない(狭い)のでそれ以上にはなれないし、何もやる気がおこらない。日本にいとやる気がでる。

・国籍は日本を選択し(自由に海外に行ける)、日本に居住する予定。インドネシア人としてはほこれない。二つの国を持っていることはよかった。でも、インドネシア人には見られたくない。日本人に見られたい。この国では日本は高く評価されている。

・「この人はプライドが高い。(略) インドネシアがベースで育っているのので、感覚的に違う。日本の感覚がある人がいい。(略) 簡単な常識をわかる。知識だけではなくて…Feelingってわかります、のりとか…家に入るのに挨拶もしないでどかどか入ってくるとか…常識レベルが違う。(略) たぶん家族感覚なんだと思うけれど。」

・感覚的には日本人と思うので、日本に帰りたい

いという気持ちが強く、他の国への海外留学は考えていない。海外は、旅行や一時的に住むとかならいいが拠点にはならない。しかし、外国人とつきあってみたいので、先のことはわからない。「日本人か、日本の感覚をもった外国人。だから、日本で生まれ育った、インターナショナルに通った外国人がベストなんです。日本の感覚があるじゃないですか。インターナショナルに通っていたから、オープンな感覚もありつつ、そういうのがベストだと思う。(略)日本人好きがいいです。日本人好きというより、アジア人好き。(略)(ハーフは)よっぽど日本にいったことがあればいいけど。今、こっちで育った子が多いから、感覚もインドネシア人じゃないですか。」

7) その他

・日本の血が入っている子はその誇りがあるので日本人だという。しかし、ここで育った日系国際児は国際児でもインドネシア人。日本語も話せないし、日本に行ったことのない子もいる。日本とインドネシアの国際児はみんな日本人にみられたいと思っているし(インドネシアが発展途上国だから)、ここから出たいと思っている。

・Eの方がインターナショナル。頭で考え、感覚的ではない。Eは日本では中学生だったので世界が狭かったが、ここに来て、いろいろと自由にできるようになったのでとても楽しい。インドネシア語はEの方ができる(10点のうち5点ぐらい)。

2.3 事例E

事例E(17-18歳)は、中学2年の2学期(14歳)に移動、K校編入。その後、日本には帰国していない。

1) 日本での生活

・日本で生まれ、育ち、幼稚園から公立の小・中学校に通学。家でも日本語を使っていた。小学校4年から部活(スポーツ)をしており、上下関係が厳しかった。

・それまで、幼稚園で1回、小学生で2-3回、インドネシアに来ている(2週間から1ヵ月ぐらい)が、観光だったので、様子はよくわからなかった。

2) 文化間移動前後の気持ち

・インドネシアに移動する前は、日本語しかできなかったので、言葉(インドネシア語はできなかった)が心配だった。現地のK校に転校するときいたときはちょっと怖かった。それ以外は、友達と離れることがいやだった。

・最初は、やはり大変だった(からい食べ物、暑さ)。入学時期等の関係で、1学年下げて編入したので、クラスメートは1歳年下だった。当初は、言葉がわからなかったが、わかってきたら、日本での上下関係の厳しさが身についていたので、「年下なのに生意気だと思っていたんですけど、半年ぐらいでそういう気持ちが消えて。年齢関係なく遊んでいます。」

・編入してから、半年は、言葉が通じなくて友達と遊ぶこともなかった。その後、バイクに乗れるようになり、友達と遊ぶようになってから、英語も上達し、勉強にもついていけるようになった。初めの1年ぐらいは、家庭教師に宿題を手伝ってもらった。

3) 現在の生活と気持ち

・半年たったころから、「自分が外部から来たから、対応しなければいけない。郷にいつかは郷にしたがえみたい。自分があとからきたから、こっちに対応していかなければみたいな。」と思うようになった。「Mはいつも好きじゃないと言っています。僕はだいいよ

うぶです。]

・生活レベル等が違うので普通のインドネシア人の友達はいない。学校には友達はいるが、外国人か国際児でインドネシア人とはあまりつきあっていない。インドネシア人がきらいというのではなくて、英語しか使わないから。学校のなかでも、インドネシア語を使う子たちはその子たちでかたまる。

・日本の生活とは変わったが、「日本には日本のいいところがあって、こっちにもいいところがある。」ここの良い点は、国際的なこと（フランス人や韓国人がいたりする）、自分でバイクでどこにでも行けること、他人の目を気にせず自由でいられること。「日本にいた時はいろいろなことを気にしていたと思うんですよ。ひとの目を気にしていた。人が自分のことをどう考えているかって、日本では決められたようにしようとか…そういうのがあったと思う。いじめが多いし。こっちはいじめないし、もっと自由な気がします。（略）そんなに気にしなくなったと思います。日本だと、あまりみんなといっしょなのはよくないし、あまり変だと外れているし、なんかすごい、ありますね。日本はそういうことに対して厳しい。こっちは全然。それに比べたら自由だから住みやすいっていうのがある。」しかし、インドネシアに住んでいても、父親とその家族・親戚以外のインドネシア人との接触がない環境（インターナショナルスクールの世界）のなかで生活している。

・インドネシア語ができないので、ここでは日本人と言われている。もしインドネシア人と言われたら、ハーフという。14年間日本に住んでいたの、日本人の方がしっくりくるが、義務教育が終わっていないことがやや心配（日本で中学を卒業していないことを母親

が心配しているの、時々不安になる）。

・日本の友達とは時々メールするぐらいで、そんなに頻繁には交流がない。

4) 言語

・家では日本語、学校では英語。現在は、英語は大丈夫だが、インドネシア語は英語より使う機会が少ないのであまりできない。

・日本語が第一、英語（大丈夫）、インドネシア語（親戚に使用、あまりできない）。日本で生まれて、育っているの、日本語でしゃべるのが一番気分的に楽。「日本語、日本のことを一番知っている。だから、楽なんだと思う。」インドネシア語もしゃべるようになったが、出てこなかったり、知らない言葉もある。

5) 国際児であること

・幼稚園年長の時に、ちょっと浅黒かったので、たまにハーフと言われたことがあったが、いじめられたわけではない。小学校低学年の記憶はないが、高学年のころ、ハーフだということを周囲の人が知らなかった。正式にはミドルネームがあるが、学校では、日本名だったので気づかれなかった。仲の良い友達は、家に遊びにくるので、父親が日本人ではないことを知っていた。

・両親の国籍が違うことについては違和感がなかった。父親が日本語をしゃべっていたので普通の家族とかわらなかったと思う。「別に、ハーフでいやだっていうことはなかったですよ。そういうのはなくて、お父さん、好きだったし、違和感もなく、他人の目が気になるってこともなく、別に普通の生活だったと思いますよ。」

6) 将来

・将来的な面では、インドネシアに来てよかった。もしずっと日本にいたら、日本語し

か話すことができなかつたし、普通に大学に入って、将来についてはあまり考えなかつた（日本では大学に入ってから将来を考える）。日本の大学には行きたくない。中学も卒業してないし、ここ的高校には日本語はないので、日本の大学に行ったときに、ちゃんと勉強できるかどうかわからないから。また、入試（帰国子女枠）に合格するかどうかもわからない。英語も完璧ではないので、英語圏に留学して、英語を完璧にした方がよいように思う。言語には興味があり、英語と日本語ができた上で、ほかの外国語（フランス語）ができると強みになり、将来の職業につながるので、フランス語圏に留学したい。

・国籍は日本にするとする。インドネシアの国籍にしても良い点があるのかわからないし、インドネシア人とは思っていない。「インドネシア人って感覚がないんですよ。日本人だっという意識が自分のなかで（ある）。（略）自分的には日本人だから、やはり日本のパスポート。そうでないとしょくりこないと思うんですよ。日本人だから日本人とみられたいというのがあるんですけど。（略）みんな、日本人って、“he is Japaneseって”。ハーフインドネシア人や日本人とインドネシア人のハーフではなくて、日本人って。こっちの人って区別をつけるじゃないですか。それで、やっぱり、僕は日本人です。」「自分的には、日本人と言われた方がしょくりくるんですけど、インドネシア人と言われても、べつにそれは間違っているわけでもないで、大丈夫ですよ。日本人って言われたら、“はい”って流すんですけど、インドネシア人ってきかれたときには、“インドネシア人と日本人のハーフ”って。（略）インドネシア人っていわれても、インドネシア語できるわけで

はないので、インドネシアとって、インドネシア語で話しかけられても、しゃべれなかつたとき、インドネシア人なのはどうしてしゃべれないのってなるじゃないですか。」

・高校を卒業したら、一度日本に戻り、友達と会ったり、状況を知りたいが、日本に住みたいというのではない。その後、ほかの国（留学）に行きたい。将来、日本に住むかどうかはわからないが、インドネシアには住みたくない。インドネシアが嫌いというわけではなく、ここで働いても賃金が低いので、旅行でくるぐらいが一番いい。住むとしたら、もっと便利なところの方がいい。

7) その他

・Mの場合は、2学年下げたので、2-3歳ほかの生徒と違ってしまい、中学・高校と上下関係が激しい中にいたので、生意気に感じてしまい話が合わない。

<考察>

事例M・事例Eは、国際児の多様性を生み出す条件（鈴木、2004）のうち、両親の組合せ（日本・インドネシア）、日本人の親（母親）、外見（日本人）、出生地（日本・二重国籍）、居住地（日本→インドネシア）、家庭環境や学校選択が、きょうだいであるため、同一、あるいは類似している。家庭内では日本語・日本文化、両事例とも日本の幼稚園から公立学校に在籍し、周囲からは日本人と見られ育った。しかし、日本に居住した期間およびインドネシアに移行した年齢（学年）と性別に違いがある。

次に、両者を比較検討し、文化間移動が日系国際児青年の言語・文化・文化的アイデンティティにおよぼす影響について考察する。

1 事例Mと事例Eの比較

事例Mおよび事例Eを時系列を中心とした項目ごとに比較検討する。

1) 日本での生活

事例Mも事例Eも日本生まれで、父親がインドネシア人という以外は日本の家庭と同じで、日本語のみで成長し、普通の日本人と同じように育ってきたと意識している。両事例とも日本の幼稚園および公立小・中学校に在籍し、部活（スポーツ）をしていた。

2) 文化間移動前後の気持ち

両者とも、移動当初は、インドネシア語も学校言語である英語もできなかった。事例Mは2学年下、事例Eは1学年下に編入した。事例Mは、移動先が「父親の実家」がある場所であることを理解しながらも、かなり抵抗があり、仕方なく移動をした。言語の困難さだけではなく、インドネシア人との「感覚」の違い（上下関係、規律）になじめない。事例Eは、移動にあたり、言葉（学校言語）についての心配があった。当初は、日本で身につけた上下関係にこだわっていたがだんだんと消えていき、友達もでき英語も上達していく。

3) 現在の生活と気持ち

事例Mは、移動後約3年たった現在でも、「日本で育ったので日本人」であり、「日本人の感覚」をもっているため、現地の感覚にはなじめないが、「郷に入れば郷にしたがえ」なので現地に合わせている。日本には友達がいなくても、現地には信頼できる友達はいない。しかし、文化間移動したことについては必ずしも否定的ではない（例：視野の広がり）。それに対して、事例Eは、「郷に入れば郷にしたがえ」で楽しく生活している。日本の生活とは違うがインドネシアの良さを認識し

ている。しかし、地元のインドネシア人との接触は家族・親戚だけで、いわばK校の「インターナショナルスクールの世界」のなかで生きている。インドネシア語が上手でないために、インドネシア人にはなれないし、日本人の方がしっくりくるが、義務教育である中学を卒業していないことが不安である。両者とも「郷に入れば郷にしたがえ」と述べているが、事例Mは無理をして合わせているのに対し、事例Eはあまり困難なく適応している。

4) 言語

両事例とも、日本語、英語、インドネシア語の順であげており、日本語が一番楽な言語である。英語はかなりできるようになっているが、インドネシア語は不十分であるという意識がある。インドネシア語は、事例Eの方ができる（事例Mの評価）。

5) 国際児であることについて

事例Mは、小さいころ、ハーフであることを誇りに思っていたこともあったが、いじめにあい、それからは、自分からハーフであることを言わなくなった。そのため、日本人と思われてきたので、ハーフを意識することはなく、日本人と思ってきた。事例Eは、いじめられたこともなく、ハーフであることを周囲に気づかれないで成長し、父親が日本語を話せたので、特にハーフであることを気にすることなく育った。両事例とも国際児であることを自然にとらえているが、事例Mの方がやや複雑である。

6) 将来について

事例Mは、日本国籍を選択し、将来、日本に居住する予定である。インドネシア人やインドネシアを理解しながらも、あくまでも「日本人の感覚」にこだわっている。事例Eも、インドネシア人という感覚はなく、「日

本人の方がしっくりする（日本人と意識している）」ので、国籍は日本を選択する（インドネシア語ができないのでインドネシア国籍では困る）。しかし、高校卒業後は日本の大学にはいかないし、将来日本に住むかどうかもわからない。両事例とも、国籍は日本を選択するつもりであり、日本人の感覚・意識にこだわっているが、事例Mが日本に居住するつもりであるのに対して、事例Eの場合は不確定である。事例Eにとっては、インドネシア語が十分でないという事実が大きく、より完璧な言語である日本語と結び付けて日本国籍を選択しようとする気持ちもあるように思われる。

両者とも日本で幼稚園から日本の学校に在籍し、家庭内でも日本語・日本文化中心で、周囲からは日本人と見られ（外見も日本的）育った。14歳（中2）および16歳（高1）でインドネシアに移動し3年以上が経過しているが、日本人の感覚や日本人としての意識をもっている。国際児であることには肯定的だが、インドネシア語はあまり得意ではなく、インドネシア人よりも日本人に思われたい。すなわち、それまでの居住地（日本）の影響を大きく受け、日本語および日本文化を継承（習得）しており、日本によりなじんでいる。ただし、事例Mが日本を向き、「日本人」であることを強く意識しているのに対し、事例Eは学校生活（インターナショナルスクールの世界）のなかで楽しく生きられるようになってきており、日本人であることを意識しながらも、インドネシアの良い点も受け入れつつある。両者とも、将来的に日本国籍を選択する予定である。しかし、近い将来（高校卒業後）の進路は、事例Mが日本の大学へ進

学し、日本に居住しようとしているのに対し、事例Eは、日本ではなく海外の大学への進学を視野にいれ、日本に住むことはあまり考えていない。なお、日系国際児の国籍選択の理由として、言語能力、利便性、そして、その国の人としての感覚・意識（文化的アイデンティティ）の保有が示唆された。

2 文化間移動が国際児青年の言語・文化・文化的アイデンティティへ及ぼす影響

16歳（事例M）と14歳（事例E）まで、日本に居住し、家庭でも、学校でも、日本語を用い、日本文化のなかで育った日系国際児青年は日本語・日本文化を母語・母文化として身につけており、日系国際児の（文化的）アイデンティティ形成に影響を及ぼす主な要因のひとつである「居住地（国）」の影響が大きいことがわかる。その後、異なる文化圏へ移動し、現地の言語であるインドネシア語と学校言語である英語を習得していくが、事例Mも事例Eも、日本語が母語で、日本文化が母文化であり、日本人の感覚を身につけている。しかしながら、事例Mと事例Eにはやや差がみられる。たとえば、両者は共通して、「上下関係」や「郷に入っては郷に従え」をあげているが、事例Mは、一貫して「上下関係」あるいは、日本的な規律等にこだわっているのに対し、事例Eは、移動当初はこだわっていたが、その後こだわらなくなっている。また「郷に入れば郷に従え」についても、事例Mは、現地に合わせようと努力しながらもここからは受け入れられないが、事例Eは、現地に合わせるだけでなく、そのなかで楽しく生きられるようになっていく。

Schrader, et al. (1979)や箕浦 (1984,1990) が、文化間移動をした移民や海外勤務者の子ども

の文化的アイデンティティについて言及しているように、日本で日本語環境で育ち、日本文化の影響を強く受けている日系国際児（MとE）の場合は、日本文化に同一視しており、日本人の感覚がしっくりとしている。しかしながら、16歳で移動した事例Mと14歳で移動した事例Eの間には微妙な違いもみられる。両者とも、「郷に入れば郷に従え」のモットーをかかげ、箕浦の指摘のように、新しい文化環境にみあうように行動面では変化してきている。しかし、事例Mは、日本の「上下関係」や規律を重視し、異文化への不満も多く、友達と信頼関係を築くことにも困難を感じているのに対し、事例Eは、異文化にそれほど不満はなく、それぞれの文化に良い所があることを認識し、新しい友人や環境（インターナショナルスクールの環境）のなかで楽しく生活している。また、事例Mは、日本語が母語で、英語には問題がないが、インドネシア語は不十分で、日本の感覚を維持し続けており、「日本人」である。それに対し、事例Eは、日本語が母語で、日本人と意識しているが、義務教育が終了していないことから、自身の日本語・日本文化に100%の自信を持ってない。地方、英語には問題がないが、インドネシア語は不十分であるため、インドネシア人としての自分や他者からインドネシア人と思われることには否定的である。事例Eの場合は、言語能力が重要な意味を持ち、一番優位な言語が日本語であるために、日本人、あるいは、日本人とインドネシア人のハーフとしているし、国籍選択の一因にもなっている。文化間移動の年齢が国際児の文化的アイデンティティにおよぼす影響については今後さらに詳細に検討していく必要があると考えられる。なお、事例Mは、日本にい

る友人たちとの良好な関係をインターネット（メールやSkype）によって維持していることから、インターネット等の通信技術の発達で文化的アイデンティティ形成へおよぼす影響も考慮しなければならない問題であろう。また、両事例の生活空間のほとんどは家庭（日本語・日本文化）とK校（インターナショナルスクールの世界）に限られており、地元の文化との接触は少ないことがもつ意味についても今後考察していかなければならないだろう。

鈴木（2008など）は、国際児にもっともしっくりするのは「国際児としてのアイデンティティ」であり、そのためには、国際児を受容する社会と国際児が両方の言語・文化を習得していることが必要であることに言及している。事例Mおよび事例Eの場合は、日本語・日本文化が圧倒的に優勢で、日本人として育ち、日本人としてのアイデンティティ（日本人の感覚・意識）が強い。他方の親の文化圏に移動したことによって、青年期ではじめて、インドネシア文化・言語に本格的に触れることになったので、二言語・二文化を完全に習得しているわけではないが、国際児としての自分には肯定的であり、「国際児としてのアイデンティティ」を身につけているように推察される。この背景には、もう一つの要因、すなわち、国際児を受容する社会の存在が考えられる。両事例は、国際児であることによって、日本社会のなかで大きな差別をうけることはなく、比較的普通に育ってきているし、移動先は、日系国際児が高く評価される社会だった。そのため、誕生から現在に至るまで、比較的社會から受け入れられてきたと考えられる。国際児を受け入れる社会の重要性があらためて示唆されるが、「国際

見としてのアイデンティティ」を形成するための要因のひとつとされている両言語・両文化の習得については、どの程度の言語・文化の習得が必要（例：義務教育終了程度）なのかも含め今後さらに検討していかなければならないだろう。

本稿では、日本で誕生・成育し、思春期以降に他方の親の国に移動した日系国際児きょうだいをとりあげ、文化間移動が国際児青年にどのような影響をおよぼすか、特に、居住地および移動年齢との関係でどのような言語・文化を継承し、どのような文化的アイデンティティを形成していくかについて考察した。居住地（国）の変更や文化間移動年齢の違いが日系国際児の言語・文化や文化的アイデンティティへ与える影響が示唆されるが、今後、追跡調査や事例を増やすことによりさらに明らかにしていく必要があるだろう。

<注>

- 1) 日系国際児の（文化的）アイデンティティ形成に影響を及ぼす主要な要因（鈴木、2004&2008）、日系国際児の言語・文化習得（継承）に関与する5つの条件（要因）、および国際家族における、子どもへの言語・文化継承のメカニズム（鈴木、2007、2008）を中心に、そのほかの理論的・実証的先行研究も参照しガイドラインを作成した。
- 2) 一般に私立学校は居住地から離れているので、車やバイクでの送り迎えが必要になる。15歳からは、バイクの免許がとれるので、高学年の場合は、バイク通学が一般的である。

<引用文献>

- 箕浦康子（1984）. 子供の異文化体験 思索社
箕浦康子（1990）. 文化のなかの子ども 東京大学出版会

Schrader, A. Niklesm, B.W. & Griese, H.M. (1979). *Die zweite Generation: Sozialization und Akkulturation auslaendischer Kinder in der Bundesrepublik*. Koenigstein/Ts.:Athenaum Verlag.

鈴木一代（1997）. 日系インドネシア人の文化・言語習得：居住地決定との関連性について 東和大学紀要, 23, 115-130.

鈴木一代（2004）. 国際児の文化的アイデンティティ形成：インドネシアの日系国際児の事例を中心に 異文化間教育, 19, 42-53.

鈴木一代（2005）. 日系国際児の文化的アイデンティティ形成：事例の検討 埼玉学園大学紀要（人間学部篇）, 5, 85-98.

鈴木一代（2006）. 異文化間心理学へのアプローチ：文化・社会のなかの人間 プレーン出版

鈴木一代（2007）. 国際家族における言語・文化の継承：その要因とメカニズム 異文化間教育, 24, 14-26.

鈴木一代（2008）. 海外フィールドワークによる日系国際児の文化的アイデンティティ形成 プレーン出版

鈴木一代（2011）. 日系国際児のアイデンティティ形成とその支援に関する実証的研究 平成20年度～平成22年度科学研究費補助金 基盤研究（C）研究成果報告書

鈴木一代・藤原喜悦（1994）. 国際家族の子どもの教育についての考え方 東和大学紀要, 20, 183-194.